

2021年度 横浜市立大学 国際教養学部

特別選抜入学試験

【海外帰国生／国際バカロレア／外国人留学生／社会人】

小論文問題

【注意事項】

1. 試験時間は90分である。
2. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
3. 問題の印刷は1ページから5ページまでである。
4. 解答用紙は2枚である。
5. 試験開始後、受験番号と氏名をすべての解答用紙の所定の欄に記入すること。
6. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙が不足している場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
7. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
8. 問題番号に対応した解答用紙に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
9. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
10. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
11. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
12. 試験終了まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
13. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。

〔 I 〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

今年(1999)3月、ユーゴスラヴィアのコソヴォ自治州をめぐる紛争から NATO の空爆が始まったとき、その是非を問うまえに、まず、一方で異様に高度のテクノロジーが使われ、他方で悲惨な難民の群れがあふれるというあまりのアンバランスに、いささかの不安も感じなかった人は少なかつたろう。そのうえで想像力をはたらかせるなら、われわれはこのような戦争が起こってしまう現代の世界の危険さに直面するという、憂鬱な思いに落ちこむ。ちょうど日本周辺でも危険な空気が垂れこめているときだけに、その思いは強かった。戦争は人類の歴史とともに古いとしても、それは人類史に含まれた、^{まがまが}禍々しい出来事である。ほんとうに世界から戦争を追い出すことはできないのか？

これまでも戦争は、いやというほど論じられてきた。かつては戦争に向かってナショナリズムをかきたてる議論がなされた時期さえあった。本格的な理論書としては 19 世紀のはじめ、国民国家どうしが戦争をはじめた頃、プロシヤの軍人カール・フォン・クラウゼヴィッツによって書かれた『戦争論』がある。そのなかにはいくつかの重要な主題がある。ひとつは戦争が暴力行為であるということだ。彼は言う、戦争はわれわれの意志に従わせるように敵対者を強制する暴力行為である、と。

クラウゼヴィッツもそうだが、暴力一般のなかに、戦争の暴力をも含めて考えるのが普通である。しかし、この自明のように見える暴力についての考え方は、決して自明ではない。ヴァルター・ベンヤミンの暴力批判論は、反対に、戦争をあらゆる暴力の根底におく。彼は暴力にも歴史性があり、国民国家が戦争をする時代には、国家の法と暴力が緊密に結びついて、戦争暴力が暴力の根源に達すると考えたのであった。歴史の導入がベンヤミンの明察である。そのように考えたからこそ、「暴力の歴史の哲学」という、暴力ないしは戦争にたいする決定的な否定を引き出す思考の次元をベンヤミンは設定しえたのだ。このことは、自明に見えることを^う鵜呑みにしないひとつの例である。

同じように、クラウゼヴィッツのもっとも有名な主題である「戦争は政治におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない」も、疑問に付してよい。クラウゼヴィッツは戦争を政治の道具だと考えていた。だが戦争と政治をかくも容易に結びつけてよいものか？

この理論の影響あるいは呪縛はきわめて大きかった。時代によって戦争のやり方は変わったが、いまでも戦争は政治的駆け引きの道具と考えられている。だが、戦争を政治の道具と見なすことは間違っているのではないか？ 国民国家が始まろうとする時代の戦争の理論家として、クラウゼヴィッツは政治と戦争を同列においた。冷戦時のいかがわしい核抑止論は、クラウゼヴィッツ理論の^{ざんし}残滓だと言えよう。今のユーゴスラヴィアと NATO の戦争の場合でも、戦争をやむをえない政治の道具だと考えているのではないか？ だが、政治と戦争をこのように単純化して結びつけるのではなく、世界という、もっと複雑な要素の関係のなかに、戦争が発生する位相を見さだめようとしなにかぎり、今日の戦争を正確に認識することはできない。



かつて、戦争の原因が人間の本性に求められたことがあった。人間にはほんらい破壊的な衝動があり攻撃性があるのだという、いわば生得論からの説明である。かりにそんな性質が人間にあったとしても、それはただちに戦争に直結するものではない。だが本能論はまったく無意味な仮説ではなかった。暴力を飼^ない馴らすことをスポーツにもとめるというノルベルト・エリアスの議論は、この生得の衝動を克服するのが人間の文明だ、というものである（『文明化の過程』ほか）。しかし、エリアスの議論は半分しか正しくない。社会の文明化、したがって民主化は、戦争技術の進歩と並行し、逆説的にも戦争がよりいっそう残酷になり、非戦闘員を巻きこむことにも結びついていたのだ。このことは悲しいことに、世界が戦争を含んで成り立っていることを示すのだろうか？

本書は、20世紀を戦争というひとつの変数によって眺めてみようとしている。戦争だけで20世紀は語れないことを承知のうえで、戦争する世界という横断面をつくってみようとしているのだ。そうすると戦争も、単純な戦闘行為ではないばかりか、たんに政治と結びつけて考えられるものではなく、世界の多様な領域とかかわりをもっていることが明らかになる。クラウゼヴィッツによる政治と戦争の連結を切り離し、戦争をもっと多面的な世界に開かねばならないことが明らかになる。(B)戦争とは、政治、経済、文化等々がからみあっている歴史的な文明の構図のどこかが崩壊したことはないのか？

クラウゼヴィッツの「政治の継続」なる主張も、戦争を始めるときには妥当に見えるが、戦争が進行すると、戦争の異常な暴力性によってたちまち無意味になってしまう経験を、われわれはしてきたではないか？ それは、ほんとうは世界の破壊である戦争を、政治の延長、政治の道具であるかのように世界に組みこんでしまっただけではないのか？

戦争は20世紀になってから、ますます非人格化している。そのことをどう捉えるか？ 戦争の破壊力が超越的なまでに大きくなったことも、その理由のひとつである。そのように恐ろしい力になった戦争が、どうして世界中でいまなお行われているのか？ こうした戦争の謎^{なぞ}を、一挙に解決できるなどとは思ってもいない。しかし分かる範囲で、この謎を考える方法を提示してみること、本書で戦争を考えようとした理由はそこにある。

われわれは20世紀のいくつかの戦争にたいして、ステレオタイプ化した戦争と平和の論じ方におちいらないようにしながら、そこでなにが起こっていたかを問うことにしよう。そして、過去の戦争の記憶が確実に稀薄化^{きはくか}していく一方で、戦争の闇^{やみ}がいつの間にかまわりに立ちこめているという現在の状況を認識する方法を見いだしてみよう。

（出典 多木浩二『戦争論』、岩波書店、1999年。問題作成にあたり本文を一部改変）

- (1) 下線部(A)について、著者がこの文章のなかで紹介している2つの主題はどのようなものですか。50字～100字で説明しなさい。
- (2) 下線部(B)の論点をふまえると、現代の戦争をどのようにとらえればよいでしょうか。21世紀に起きている、または起きた戦争、紛争のなかから一つの事例をとりあげ、250字～300字で論じなさい。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

多くの人が暮らす都市は、家庭、職場あるいは学校という人間のつながりの最小単位が積み重なって形成されています。加えて地縁や目的を共にするつながり（コミュニティ）もあるわけですが、極端に言えば別に参加しなくても暮らしていただけます。

町内会やPTAといった地縁団体は組織率の低下が問題になっており、東京都では平成25(2013)年度に約54%と半分強の世帯しか加入していません。

こうした地縁団体に対しては、役員の決め方などの組織構造、毎年同じことを繰り返す活動内容に対する批判も見られますが、いざというときのための防災活動、ゴミの管理、子どもの見守りなど重要な活動を行っていることは事実です。

地縁団体に入る人が減っているのは地縁によるコミュニティを不要だと感じているというよりは、都市住民の多くが忙しい毎日を過ごし、家庭と職場・学校の往復になってしまっているなかで地域の問題に関わったり、関心を持ったりする余裕がないという現状認識のほうが正しいでしょう。

ただ、地縁によるコミュニティが希薄になってしまうことの問題は大きいと筆者は考えています。特に懸念するのは、それだけでなくもつながりの薄い都市部で、物理的に困っている人、精神的に追い詰められている人など、様々な事情を抱える人の存在が一層見えにくくなっていくことです。それによって、例えば災害時などいざというときの互助が働きにくくなる可能性があります。

もちろん、地縁コミュニティさえあれば困っている人が減るわけではありません。住民が意思統一しやすいのは直接的に生活の質を上げること、または、地域の価値を維持向上させることです（価値を向上させると税金が上がるのでいやだという人もいますが）。

例えば、空き家を減らす活動は治安や周辺の資産価値に直結するので、比較的コンセンサスが得やすいのですが、孤立する家庭の支援などは自分の生活に直結するわけではないため、面倒なことに関わりたくない人も多く、なかなか進みません。

筆者はまちづくりを研究していますので、多くの地域に出向き、そこを住みよくしようと奔走している人と出会います。ある地域で、こんなことを聞きました。

「多くの住民がまちづくり活動に参加してくれると、人の温かさにつながりの価値を感じます。でも、他方で自死、孤独死が起きたとき、地域はそれを隠そうとする現実もあります。それが起きたことが知れ渡れば、そのマンションはおろか地域全体の資産価値が下がるリスクがあるからです。地域に悪いイメージがついてしまうかもしれません。悲しいけど、それが現実なのです」

まちづくりに無力さを感じた瞬間でした。こうした出来事を予防するための活動ができないのみならず、起きてしまえば何とか隠そうとする地域の論理は、直視したくない都市社会の現状ではないでしょうか。

こうしてつながりが希薄化する中で、玄関の外からは見えない人々の暮らしには、信じたくないほどの深刻な事態があることが最近のニュースから明らかになってきています。

2015年12月25日、十分な睡眠時間を取れないまま長時間労働を強いられ、言葉の暴力を浴び、精神的にまいって自殺してしまった享年24歳の元電通社員はツイッターでSOSを発していたものの、社員寮から飛び降りるまで誰も助けられませんでした。

2018年3月に東京・目黒区で起きた享年5歳の幼児虐待事件も、何度も助けられる機会があったにも関わらず、学校、児童相談所、警察といった組織の分担の狭間にかかり、しかも、地域間の連携もうまくいかず自宅の中で最悪の事態を迎えていました。

そのほかにも障がいを持つ子どもと親の無理心中やその未遂事件、孤立する老老介護など、玄関の中で起きている悲惨な出来事は後を絶ちません。

私たちは、こうした現実が、遠くのどこかで起きている話ではないことに気づかなければなりません。お隣さんが、いや私たち自身が、ある日、玄関の中でSOSを出して動けなくなる、そんな事態になってもおかしくないのが今日の都市なのです。

しかも、都市は誰にも気づいてもらえない物理的環境を一生懸命つくっているのです。侵入者を防ぐ二重三重のセキュリティを備えたマンションは、住民に安心を与える一方、地域の団体や民生委員などからすると、住民とつながる手立てが見えません。マンションが立ち並ぶ道を歩いていると、ここを歩く子どもたちが不審者に追いかけられたとき、逃げ込める場所があるのか不安になります。

大型マンションの多くは、地元自治体との協議を経て地域貢献のために誰でも使える通路や空地（小さな公園のような場所）を提供しますが、そうした空地が地域で活発に使われているケースはあまり聞きません。地域に公開されているとはいえ、管理責任はマンション管理組合にありますから、管理を省力化し、コストを上げないようにすることが重要で、あまり活発な利用は好ましくないのです。

また、不特定多数の人が使うことによる管理低下、治安悪化への不安も相まって、自らの敷地に他人が入ってくることへの抵抗が大きいのが現状です。かつての日本家屋には、「縁側」という言葉に象徴されるように地域に対して開放的な住まい方が見られましたが、近年の家屋は外には見せない、開かない姿勢が明確です。

(中略)

今日、どれだけ大変かを別にすれば、多かれ少なかれ、ライフコースに関わる問題はすべての人が抱えています。人生100年時代に差しかかる今日、病気、出産、子育て、介護などライフコースのどこかで同じ生活が送れなくなる事態は生じます。

しかも、そのときに助けてくれる家族や親族が近くにいない人が多いのが都市の特徴です。「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」は、自分の育った市町村以外のところで子育てをしていることを「アウェイ育児」と呼び、親や親族の助けを得られないこれらの人たちへの支援が必要だと唱えています。

しかも、この「アウェイ育児」をしている人が、調査対象の72.1%を占めていたと報告されてお



り、明らかに孤立する子育てが一般化している現状が垣間見られます。このようなライフコースに関わる問題は誰にも訪れ、明日目覚めたら助けを呼びたいくなる事態に陥る可能性は、私にも読者の皆さんにもあるのです。

私自身が、子育て、介護等、ライフコースにかかわる経験をするにつれ、支え合いのまちづくりがより重要だと感じるようになりました。

基本的に、日本の福祉サービスは申請主義で求める人にしか提供されません。どうしたらいいかわからない人、情報を得る力がない人は容易に孤立することが想像できます。幸いなことに、私には声をかけてくれる友人がいました。それは保育園や学校関係者だけでなく、ママ友たちだったり、地域の方だったりしました。悩みを共有してくれる人たちの存在だけでも、人間は明日への力を得られると実感しました。

こうした経験から、これからの都市には、ほんの少しでも助けを得られる場、話を聞いてもらえる仲間をできるだけたくさんつくっておくことが必要ではないかと思うようになりました。

(中略)

このように、見えない排除の構造から自らを傷つけないように、都市生活の一つの術として、多くの人々が同質的な社会にとどまる努力をしています。そのことがより同質性を高め、その中にとどまることを選ばなかった人を簡単に孤立させています。

普段からつながりの少ない「アウェイ」な状況で都市の暮らしを営む人たちは、悩みを抱いたときにも身近なところで相談をしたり、気分転換に出かけたりする場がありません。

こうして多くの人たちが孤立を深め、玄関の内側に引きこもってしまう人たちが増えている状況は、現状把握と支援や解決のための社会的コストを押し上げていくでしょう。冒頭から述べてきた通り、玄関の内側で悩んでいるのは、必ずしも特別なケースを抱えている人ではないことを考えると、都市とは孤立しやすく、圧倒的に **Vulnerable** な(傷つきやすい)存在が集合している社会であることは明らかです。

この「アウェイ」な個人と家族の暮らしを支える仕組み、そして誰もが自分らしく過ごすことが許される自由をこれからの都市には構築していかなければなりません。

そんな中で筆者が夢想するのは、都市に暮らす個人が緩やかに助け合える場や仕組みが散りばめられた地域社会の姿です。

(出典 保井美樹編著『孤立する都市、つながる街』、日本経済新聞出版社、2019年。問題作成にあたり本文を一部改変)

- (1) 下線部の状況が生み出されるのはなぜか。本文中の言葉を用いて 60 字以内で説明しなさい。
- (2) 本文を通して著者が必要と考える地域社会の姿を簡単に説明した上で、それを実現するための具体的な方策について、あなた自身の考えを 250 字～300 字で述べなさい。